

“だからさ、会いたい人がいて会えるんならさ、会えるうちに会っておかなきゃいけないだよ、ぜったいに”

【夜さろん】 第17夜

《定点観測としての読書会 ～川上未映子『あこがれ』～》

## 【夜さろん】 第17夜

### 《定点観測としての読書会 川上未映子『あこがれ』》

2016年1月29日(金)@渋谷 19:30 - 22:00

参加者：10名、 進行：芹澤

#### 《開催趣旨》

【朝さろん】ではこれまで、川上未映子の長編小説『ヘヴン』、『すべて真夜中の恋人たち』を半年間かけて丁寧に読んで来ました。過去の長編はすべて会で取り上げて来たので、本作も取り上げてみようと思いました。その理由は、作品の優劣に因るわけでも川上作品好きだからというわけではなく、ひとつの“定点観測として”です。

著者自身の再婚・出産という転機はあったでしょうが、その痕跡を作品に“探る”のではなく（否定はしません）、そうした目につきやすい外的変化の影に隠れた内面の深化を、あるいは環境の変化に起因した精神性の成長や作品世界の広がりみたいなものを、作品の行間や背景から感じ取ってみる。——そういう定点観測の時間になったらいいなと考えています。

前作の長編『すべて真夜中の恋人たち』から4年が経ちました。なので、定点観測という視点でいえば、『あこがれ』という新作長編を読みながら同時に“自分自身にとっての”4年という歳月や時間の流れについても考えることでもあります。年のはじめに、この一年に思いを馳せながら、たっぷり2時間半の読書会をやってみます。

※過去の開催記録はこちらからご覧いただけます

▼第1長編『ヘヴン』

[http://salon-public.com/wp-content/uploads/2014/03/hondana\\_31.pdf](http://salon-public.com/wp-content/uploads/2014/03/hondana_31.pdf)

▼第2長編『すべて真夜中の恋人たち』

[http://salon-public.com/wp-content/uploads/2014/06/hondana\\_36\\_repo.pdf](http://salon-public.com/wp-content/uploads/2014/06/hondana_36_repo.pdf)

『あこがれ』は、

生きる上で不可避な喪失（不在）の体験を、著者が得意とする幼年期の人物造型/内面描写を存分に発揮しながら、少年少女ふたりの励まし合う交流譚として温かく描いた作品。

#### 【本】

『あこがれ』 川上未映子 （新潮社、2015）

[初出： 第1章/『新潮』2013年11月号、第2章/『新潮』2015年9月号]

#### 【川上未映子(かわかみ みえこ)】

1976年8月29日、大阪府生まれ。2007年デビュー小説『わたくし率イン歯一、または世界』（講談社）が第137回芥川賞候補作に。同年第1回早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞受賞。2008年『乳と卵』（文藝春秋）で第138回芥川龍之介賞を受賞。2009年、詩集『先端で、さすわさされるわそらええわ』（青土社）で第14回中原中也賞受賞。2010年著者初の長編小説『ヘヴン』で平成21年度芸術選奨文科大臣新人賞と第20回紫式部文学賞を受賞。2011年10月、同じ芥川賞作家の阿部和重と再婚。2012年5月末に男児を出産。2013年詩集『水瓶』で高見順賞を、短編集『愛の夢とか』で谷崎潤一郎賞を受賞。

## 【ストーリー】

みんな遠くへ行ってしまう。本当の自分を知っているのにね——。四年ぶりの長篇小説。表彦とヘガティ、思春期直前の二人が、脆くはかない殻のようなイノセンスを抱えて全力で走り抜ける。この不条理に満ちた世界を——。サンドイッチ売場の奇妙な女性、まだ見ぬ家族……さまざまな〈あこがれ〉の対象を持ちながら必死で生きる少年少女のぎりぎりのユートピアを繊細かつ強靱無比な筆力で描き尽くす感動作。

## 【川上未映子と「たけくらべ」】

川上の「乳と卵」は一葉の「たけくらべ」を踏まえて書かれている。「乳と卵」の三ノ輪に住む夏、という語り手の設定は一葉自身を連想させ、（一葉の本名は奈津あるいは夏子で、いまの台東区三ノ輪界隈に住んでいた）、夏のもとにやってくる姉・卷子とその娘・緑子は「たけくらべ」の女主人公・美登利と彼女の姉の花魁・大巻を思い起こさせる。「たけくらべ」に出てきたのと同じようなセリフも登場すれば、五千円札（一葉の絵柄）も出てくる。息の長い文体や、会話を地の文で処理するところも一葉ばりなら、一葉と通じるさまざまなテーマも現代的に変奏されながら浮かび上がってくるのだ。

この「たけくらべ」を、2015年に川上は現代語訳して発表。現代語訳にあたり「一葉が今「たけくらべ」を書いたら絶対にこうなったにちがいないと信じきって&あの匂いあの話し声あの時間に持てるすべてを浸しきって、全力全愛でとりくむ所存です」と抱負を話している。

- 「ゑゑ厭や厭や、大人に成るは厭やな事、何故このやうに年をば取る」  
——美登利（「たけくらべ」）
- 「厭、厭、おおきなるんは厭なことや、でも、おおきならな、あかんのや、くるしい、くるしい、こんなんは、生まれてこなんたら、よかつたんとちやうんか、みんな生まれてこやんかったら何もないねんから」  
——緑子（「乳と卵」）

## 『たけくらべ』

明治の小説家、樋口一葉の短編小説。1895年（明治28年）から翌年まで「文学界」に断続的に連載。1896年（明治29年）4月10日、「文芸倶楽部」（博文館、第二巻第5号）に一括掲載された。題名は伊勢物語23段の和歌に因む。

吉原の廓に住む14歳の少女美登利と僧侶の息子藤本信如との淡い恋を中心に、東京の子供たちの生活を吉原を背景に描き出した作品。子供から大人に移り変わる少年少女の心理を小説することは当時前例のない試みであり、一葉の名を不朽にした。

吉原の遊女を姉に持つ勝気な少女美登利は、豊富な小遣いで子供たちの女王様のような存在だった。対して龍華寺僧侶の息子信如は、俗物的な父を恥じる内向的な少年である。

大鳥神社の三の酉の市の日、正太郎は髪を島田に結い美しく着飾った美登利に声をかける。しかし美登利は悲しげな様子で正太郎を拒絶、以後、他の子供とも遊ばなくなってしまふ。ある朝、誰かが家の門に差し入れた水仙の造花を美登利はなぜか懐かしく思い、一輪ざしに飾る。それは信如が僧侶の学校に入った日のことだった。

## 『乳と卵』

娘の緑子を連れて大阪から上京してきた姉でホステスの卷子。卷子は豊胸手術を受けることに取り憑かれている。緑子は言葉を発することを拒否し、ノートに言葉を書き連ねる。

“だからさ、会いたい人がいて会えるんならさ、会えるうちに会っておかなきゃいけないんだよ、ぜったいに”

【夜さろん】 第17夜

《定点観測としての読書会 ～川上未映子『あこがれ』～》

夏の3日間に展開される哀切なドラマは、身体と言葉の狂おしい交錯としての表現を極める。日本文学の風景を一夜にして変えてしまった、芥川賞受賞作。

### 『ヘヴン』

〈わたしたちは仲間です〉——ある日届いた手紙。斜視のため壮絶ないじめを受ける「僕」と、同じ中1のクラスで不潔を理由にいじめられる女の子「コジマ」。クラスの女子と男子から陰惨なイジメを受けているふたりにとって、だからひそかに交わす手紙や、たまに会って話をすることは、とても大切だった。無二の友達。あの日、僕らを邪悪な力が襲うまでは……。 「僕とコジマの友情は永遠に続くはずだった。もし彼らが僕たちを放っておいてくれたなら」。 「苛められ暴力を受け、なぜ僕はそれに従うことしかできないのか」——。14歳の苛めを正面から描き生の意味を問う、哀しくも美しい物語。

### 『すべて真夜中の恋人たち』

〈真夜中は、なぜこんなにもきれいなんだろうと思う。それは、きっと、真夜中には世界が半分になるからですよと、いつか三束さんが言ったことを、わたしはこの真夜中を歩きながら思い出している。〉

入江冬子(フユコ)、34歳のフリー校閲者。人づきあいが苦手な彼女の唯一の趣味は、誕生日に真夜中の街を散歩すること。友人といえるのは、仕事で付き合いのある出版社の校閲社員、石川聖(ヒジリ)のみ。ひっそりと静かに生きていた彼女は、ある日カルチャーセンターで58歳の男性、三束(ミツツカ)と出会う…。あまりにも純粋な言葉が、光とともに降り注ぐ。いま、ここにしか存在しない恋愛の究極を問う衝撃作。

### ※参考資料

- ・「人が生まれ、会おう不思議 川上未映子新刊「あこがれ」」  
朝日新聞 [掲載]2015年11月24日  
<http://book.asahi.com/booknews/update/2015112700005.html>
- ・蜂飼耳・書評「あこがれ」(朝日新聞、2015年12月6日)  
<http://book.asahi.com/reviews/reviewer/2015120600007.html>
- ・中条省平「無垢と経験のはざままで - 川上未映子『あこがれ』論 -」  
(『新潮』2016.1月号)
- ・鴻巣友季子「sympathyの彼岸 - 書評:『あこがれ』 -」  
(『群像』2016.1月号)
- ・川上未映子『水瓶』(青土社、2012)
- ・川上未映子『愛の夢とか』(講談社、2013)
- ・川上未映子『きみは赤ちゃん』(文藝春秋、2014)
- ・川上未映子『樋口一葉 たけくらべ(池澤夏樹=個人編集 日本文学全集13)』  
(河出書房新社、2015)

▽「人が生まれ、出会う不思議 川上未映子新刊「あこがれ」」

朝日新聞 [掲載]2015年11月24日

<http://book.asahi.com/booknews/update/2015112700005.html>

子どもの話なのに、子どもの話にとどまらない。川上未映子さんの新刊『あこがれ』（新潮社）は、不思議な奥行きのある小説だ。主人公は男の子と女の子。小学生の目の高さから、人が生まれて出会う不思議さ、そしていとしさを突きつめる。

物語は2人の、ささやかな冒険を追っていく。前半の主役は男の子。サンドイッチ売り場で働く個性的な女性にあこがれて、女性を描いた絵を持って会いに行く。女の子に背を押されるようにして。

後半は女の子の物語。父に前妻がいて、自分の姉にあたる女の子がいると知り、訪ねていく。男の子に付き添われて、少し胸を躍らせて。

優しくほろ苦い経験を通じて、2人は半ば無意識のうちに、人と人が接する一瞬のかけがえのなさに向かい合う。「大事なことに気づくのは、大人だけじゃない。目と頭がまだやわらかい少年少女の視点を借りることで、私たちが生きる世界を理解し直せるんじゃないかと思った」と川上さんは言う。

2人の小学生はともに、一番近い家族を失った経験を抱えている。空白に慣れているようでいて、時に寂しさがこぼれ出す。「誰かにあしたまた会えるのは、会いつづけてるから」。はっと胸をつかれるような素朴な言葉が、物語の端々で読者を待つ。

そしてかすかな、けれど確かな重みを

物語に加えているのは、東日本大震災への意識だ。2人が小学校1年のときに地震と津波、そして原発事故が起こったという設定を、あえて物語に組みこんだ。

「あの震災で、私たちは大きく変わった。子どもたちにとっても、身体に刻みこまれた共有の記憶としてずっと残る出来事だと思う」

「あこがれ」という書名は、ずいぶん悩んで決めたという。サンドイッチ売り場の女性への思慕、まだ見ぬ姉を思って揺れる心。表面的にはそういったものを指すようでいて、でもきっと、それだけではないはずなのだ。

「あこがれは何歳になっても、誰もが等しく持てるもの」と川上さんは言う。

「伝わらなくていい、後に残らなくてもいい。そんな希望のような気持ちだと思っんです。夕焼けを見るときみたいな」

(柏崎歓)



“だからさ、会いたい人がいて会えるんならさ、会えるうちに会っておかなきゃいけないんだよ、ぜったいに”

【夜さろん】 第17夜

《定点観測としての読書会 ～川上未映子『あこがれ』～》

## ——開催後の記録——

### 【『あこがれ』の感想】

- ・（川上自身も現代語訳した）『たけくらべ』の影響が感じられる。モチーフや息の長い文体など。
- ・子どもの視点に精通しているなど改めて感じた。『ヘヴン』でもそれを感じた。
- ・長編ではなく、第1章と第2章がペアになっている二作品（短編集）という印象。
- ・永井均の哲学にも通じるような、ミニ哲学のような視点（問いかけ）が面白かった。
- ・全編を通じて、もっと物語に起伏があってもよいのではないかな？
- ・第一章って特に何も起こっていないように思えた。だけれどしっかりとドラマを感じるものとして読める作者の描写力、人物造型に感心した。
- ・なぜ『あこがれ』というタイトルなのか、すぐにつながらなかった。  
（読後感と『あこがれ』という題名がそぐわない気がした）
- ・二人がおとなになる話だと読んだ。その大切な変化を描いた作品。ただし、派手な事件が起こるわけではなく、終始落ち着いた筆致で、それがよかった。
- ・関西人っぽいニュアンスを感じた。微妙なオノマトペなど。それが耳心地いい。
- ・最初に第二章を初出で読んでいたので、次に第一章を読むという順番になり、麦彦への感情移入がしづらかった。
- ・第一章で、「ぼく」はミス・アイスサンドイッチのどこに惹かれたのか。よくわからなかった。
- ・第二章のヘガティの心理（内面描写）が、小学6年と思えないほど大人びていた。出来過ぎという印象。
- ・ヘガティという名前の由来がユーモラスで、印象づける上でも、上手だと思った。
- ・「どうして泣いているかわからなかった」という風な文章があって、そこが真実味があって、共感出来て、魅力的だと思った。
- ・主人公になる二人とも、“会いに行く（行きたい）”と思わせる現実的な対象を持っていて、それが題名の『あこがれ』と関連があるのかなと思った。同時に二人とも、“会いたくても絶対に会えない”という存在を抱えていて、このふたつの真逆のベクトルが重ねられているように感じた。
- ・大人が書いているのに、幼少期の感情表現の豊かさがすごく上手に描かれている。
- ・帯と内容がずいぶん違う印象を受けた。
- ・『ヘヴン』や『真夜中』みたいな暗さや痛さが前面に出る作品ではなく、穏やかな時間が描かれていてよかった。
- ・チグリスがとても大人びていた。皮肉屋というか。主人公ふたりに比べると、あえていえば斜に構えている印象を受けた。
- ・「スーパーボールがぼーんと高く跳ねるように」という描写など、身体感覚に訴えるような、視覚的な比喩がすごく鮮やかに感じられた。
- ・アオの話のところ、復讐心の現れのようなものを感じた。アオがなにを感じていたか、興味が沸いた。
- ・「苺ジャムから苺をひけば」——とはどういう意味だろう？
- ・読んでいて、素直に楽しいと感じた。

## 【特に話し合った点】

---

1) : 帯には“四年ぶりの長編小説”と書かれているが、本作はほんとうに「長編小説」なのだろうか。(連作の)「短編集」なのだろうか？



- \* (版元や作家の意志は脇に置いて) 本作を「長編小説」と見做すなら、第一章と第二章を共通して貫くテーマ、あるいは二作を一つと見做してはじめて浮かびあがる全体性のようなものを、どのように考えることができるだろうか？
- \* 第一章と第二章がどういう構造になっているか？ どんな共通性と差異があるか？

2) : (上記に関連して) 第一章と第二章の発表にかなりの時間が空いている。これだけの期間があいていることと、本作の構想にはどういう関連があるのか？ (ないのか？)



- \* 第一章発表時点では長編の構想はなく、その後に合せ鏡になるようなものとして第二章に着手し、両者を一つにしようと考えたのか？ それゆえ空白が生じたのか？
- \* 第一章の発表が2013年11月、第二章が2015年9月。この間の約2年というのは、第一章が小学4年で第二章が小学6年という作中時間の経過に実際にあわせて執筆したものなのか？ 二年の時間の経過を実際に体験しながら登場人物の造型(成長/変化)を考えたのか？
- \* 第一章と第二章を、「物語の構造」「制作の背景」「両作の有機的な連関性」というように複数の視点から立体的に眺めることで、『あこがれ』という作品をより深く理解できるのではないか？

3) : 第二章の章タイトル「苺ジャムから苺をひけば」とはどういう意味か？

詩的で面白いこのタイトルに籠められた意味はなにか？



- \* 苺ジャムづくりから現物の苺を抜いたとすると、そこにあるのは本物のジャムづくりではなく、抽象的なジャムづくり——ジャムづくりの記憶。苺ジャムづくりはヘガティーの母親が行っていたことで、ヘガティーと父親の間で今も行われているもの。ヘガティーは幼くして母を亡くしたので、母についての直接的(つまり“本物”)の記憶を持っていない。苺ジャムづくりがヘガティーにとって母の存在を感じる大切な行為だった。
- \* ゆえにタイトルが示すのは、若くして亡くした母への思慕。そして今現在、自分の隣にいる父であり、父自身も失った母を苺ジャムづくりを通じて思慕しているという切ない現実なのではないか？
- \* ヘガティーにとって母親とは触れ合った記憶がないが、苺ジャムづくりやクリスマスツリーの存在を介して、母がいない空白をありありと実感する生活をしている。しかしそれらの“痕跡”があるからこそ、ヘガティーの中で母はいま現在のヘガティーにつながる大事な存在として常に想起され直している。直接的な母との触れ合いの記憶を持たないという「空白」と、幼くして癌で母親を亡くしたという「喪失」が、母について「二重の不在」ともいうような心苦しさを小学6年のヘガティーの心に形成しているのではないか？

“だからさ、会いたい人がいて会えるんならさ、会えるうちに会っておかなきゃいけないんだよ、ぜったいに”

【夜さろん】 第17夜

《定点観測としての読書会 ～川上未映子『あこがれ』～》

4) : 第一章の「ぼく」の語りの構造について

ぼくの独白体（間接話法）で処理される会話と、直接話法（鍵括弧）で表現される会話が、「ぼく」とその話者の関係別に使い分けられているのではないかと



\* 小学4年の「ぼく」は母親と祖母という「家族」との会話は、まるでちゃんと話をしていないかのように独り言のような地の文（間接話法）の内面描写「のみ」で処理している。対して、ヘガティーなど家族以外の人間との会話では間接話法と直接話法が両用されている。なぜ家族との会話では間接話法だけなのか？

\* このことを考えるのに適当な箇所が二か所ある。

一つ目は「ぼく」と家族の会話の特殊な使用例である。p46で「ぼく」が祖母に話しかけるシーンでは家族に対して初めて鍵括弧（直接話法）が使用される。しかし注意深く読めばこのシーンの祖母が「眠り続けている」ことがわかり、友人たちとの会話のキャッチボールと同様な使い方がされていないことがわかる。鍵括弧で発言を括弧に入れても、発言の質——その実態は独り言と同様である。これを裏付けるのが、p81で「ぼく」が祖母に話しかけるシーンだ。ここでの祖母は「起きていて」、しかもぼくの話に答えを返すのだが、その答え（「泣いたらだめよ」）は再びぼくの内面の独り語り（間接話法）で処理されてしまう。

ここからわかることは次のことである。「ぼく」の精神性は、友人とは直接話法も間接話法も使えるが、家族の声は内的な語り（間接話法）としてしか表現されない。これは寝ていて意識のない家族とは直接話法で呼び掛けが表現されている点からも明らかで、「ぼく」の語りの言説の中では両者の使用法が厳密にコントロールされていると理解できる。

\* もう一つが、p83での「ぼく」とミス・アイスサンドイッチとの会話の変化だ。第一章のクライマックスであるこのシーンの途中で「ぼく」の語りは突然、それまでの家族同様の独白体から直接話法へと変化を迎える。この背景にあるものは何か？

ミス・アイスサンドイッチに会うことをおそれずると先延ばしにしていたぼくは、ある日ヘガティーから強く説得される。その時にヘガティーが言ったのが「だからさ、会いたい人がいて会えるんならさ、会えるうちに会っておかなきゃいけないんだよ、ぜったいに」（p72）という言葉だ。この言葉に背中を押されるように、ぼくは店を辞めた二度と会えなくなる前の最後の機会に、勇気を振り絞ってミス・アイスサンドイッチに会いに出かける。しかしそう決めた後でもまだ「でももう会えないということがどういうことなのか、その肝心なところがわからないままだった」（p79）とぼくは独白している。そして「考えることをやめて、ミス・アイスサンドイッチの絵を描きつけた」（同）のだった。だが、ミス・アイスサンドと正面から向き合って彼女と言葉を交わしているなかで、ぼくの心に「もう会えないということがどういうことなのか」が実感として去来してきたと考えられるのではないかと？ その変化がミス・アイスサンドイッチとの会話の表現が途中で突然変化しているという仕方で表されているのではないだろうか？

\* ミス・アイスサンドイッチとの別離の前から、「ぼく」の内心には別離への恐れがそもそもあった。「おばあちゃんは、たぶんきっと、そう遠くないうちに死んでしまって、そして、いなくなってしまうだろう。ときどき思いかけてはこわくなってすぐに蓋をしてなかったことにしよういつものあの考えが、ぼくにゆっくりと覆いかぶさってくるのがわかった」（p45）と祖母に対して感じているあの恐怖が、ミス・アイスサンドイッチとの別離において、はじめて真正面から受け止められているのではないだろうか？ ぼくの恐れは、別離（死）への漠然とした恐怖ではない。家族である父親

を4歳で失い、そのことの悲しみや喪失感を十分知っているからこそ、10歳にして経験済みの身を切られるような痛みが再現することへの恐怖だろう。

- \*ぼくの中では、ミス・アイスサンドイッチへの好意は、絵本で見た大きな犬の目への懐かしさにつながっていた。その記憶は、母や祖母が読み聞かせてくれたもの「ではない」というという一点を通じて、父が自分に読んでくれたものかもしれないという、今はいない父親への慕情——記憶として、ぼくの中で大事に育まれていた。「ぼく」が一目ミス・アイスサンドイッチの姿を見て離れ難い思いにとらわれたのは、器量が良いとか、ぼくの異性愛としての好みに合致するからではない。ミス・アイスサンドイッチに、失われた父親への思慕を重ねることができたからではないか？
- \*ミス・アイスサンドイッチとの別離において「もう会えないということがどういふことなのか」に向き合った「ぼく」は、死期が迫りつつある祖母や母親といった家族とも、同じような心持ちで向き合えるようになったのではないか。そのことは、ミス・アイスサンドイッチとの別離の後、母親との会話が初めて「これだった。ママ、これだった」(p86)という風に、直接話法での正対した会話として表現されていることから理解されよう。逆に言えばこれが、「ぼく」の語り表れる内面の変化として表現されるために、前半部では語り方が慎重にコントロールされていたのだろう。

### 【作品を読んで、考えてみたいと思ったこと（問い）】

---

- 1) : 「私」（わたし/ぼく）ってなに？  
その不思議さ。みんながみな「私」であるが(p245)、その「私」は、「この私自身」という時の「私」意識とは決定的に異なっている。
- 2) : 子どもって何？ 大人って何？  
特に、子どもを通じて人間全体を描く（表す）ということができるとどうだろうか。  
大人って何？  
“アルパチーノ”みたいな愛言葉みたいなものもいずれは失う。気が付いたときには手から零れ落ちてしまっている。失い続ける存在が、大人なのか？
- 3) : 喪失感を感じたらどうしたらよいか？  
喪失感と向き合うために大事なこと、埋め合わせるために必要なことはなにか？
- 4) : 「誠実さ」って何だろう？  
目の前にあること（悲劇でも苦痛でも快楽でも）、どう向き合い、答えを積み重ねていくか？  
「素直さ」ってなんだろう？  
チグリスマみたいに皮肉屋に、斜に構えず、麦彦やヘガティーのように受け止め、受け入れる真っ直ぐさとはなにか？
- 5) : （前作『真夜中』でも出ていた）“恋愛の成就”とは何か？  
作中で「付き合う」や「好き」が出てくるが、それ以上に力強い結びつきを感じる麦彦とヘガティーの間柄とは何なのか？ この関係はこれからどうなっていくのか？
- 6) : 肉親の特別さと他者（友人）について。「他者」と「自分」の違いはなにか？  
自分にとって重要な他者とどうつながり、どう距離感をつけるのがいいのか？



“だからさ、会いたい人がいて会えるんならさ、会えるうちに会っておかなきゃいけないんだよ、ぜったいに”

【夜さろん】 第17夜

《定点観測としての読書会 ～川上未映子『あこがれ』～》

7) : 『あこがれ』とは何か？

『あこがれ』がぴったりとこない。ほかになにかあり得るだろうか？

大人になるのがイヤだと言っているようで、その実、逆に憧れているところもあるのではないか？

### 【今後検討すべき作品中のポイント】

---

- 1) : 麦彦とヘガティの二人だけにしか通じない「アルパチーノ」のような合言葉を共有できる関係、二者間だけで意味が付与されている言葉とは、どんなことを表しているか？
- 2) : 組体操についての言及がわざわざ出てくる上、サポーターを使用した上で実施するという作中の結論が出されているが、現在の世相ともあいまって、どのような意味を読み取ることができるだろうか？
- 3) : 東日本大震災や原爆事故への言及(p97)がなされているが、わざわざそのことに作中で触れられている点と、何が自分たちの同時代史であるかを卒業文集で社会的事件をまとめるという作業を介して問い直している点を踏まえて、どう解釈するべきか？
- 4) : 自分たちの住む町の駅前で、わりと大きな火事を目撃するというシーンにかなり紙幅が割かれているが、この火事のシーンが物語の中で持つ意味は何か？ 上記3) で出た「同時代史」という視点や、ヘガティの父親のWikipediaの記事らしき情報の中で取り扱われた、他人の歴史に表れる「わたし」という問題にも絡めてみるとどうなるか？
- 5) : 「どんなに世界が広くても、どんなにたくさんの人がいても、今、わたしがいるここは、ここにしかなくて、そしてそれが、ありとあらゆるところで、同時に起きているのだ。すべての人に。すべての物に」(p245)とは、いったいどういう意味か？

以上

